

山歩楽とハリー



異夢のようなです。わが家では、家内は私と行きたいと言っており、老後は二人旅を楽しみたいと思っています。

海外にも時に出掛けます。今年七月、横浜商取のミッションでブラジルを訪れた時、途中NYで一泊し、ワールドトレードセンターのツインタワー(写真)の一〇七階で食事をしたのですが、あんなことになって感無量です。

先ごろ、BMWの一〇〇〇ccという大型バイクに乗って学生時代にホンダドリム号に初めて乗った時の感激がよみがえってきました。いつかは、ハリー・デビットソンを手に入れて、遠くを走りたい、そんな夢を描いている昨今です。

意志あるところが道あり



私が生まれ育った若松市(現北九州市若松区)は筑豊炭田で産出された石炭の集散地として栄えた町です。火野平の「花と龍」の世界ですから気性の激しいことでは有名な土地柄です。

当社に入社して行く学卒の若者たちには開口一番、「もう学割は効かないよ」と申し渡し、自己責任で行動するよう強調します。同時に私の座右銘である「意志あるところが道あり」と発破をかけておられます。飢饉時代のものからみると飽食時代の若者には甘えがあるようにみえてしまうが、ありませぬ。

鎧橋随想

利便性はどうか



いま、業界関係団体は二〇〇四年末からの委託手数料完全自由化を前に、あるべき姿を求め、課題解決に取り組んでいます。先物協会が昨秋、「短中期ビジョン実現に向けての取組課題の行動目録」を掲げたのもその一つです。

あるべき姿の実現には痛みが伴います。しかし、我々はそれを乗り越えなければなりません。使い勝手のよい市場の追求を通じて投資家により利便な市場を提供すれば、それが、ひいては信頼感を高め、業界の発展を促してくれそうです。

私にとってはこれから長く働く場所です。それだけに、負の遺産の蓄積を真剣に反省し、前向きな議論を積極的にやっつけていかねばならない、と感じています。

ルールとルールズ



24以下しかプレーできない」というゴルフ場があります。ある時、大切なお客様をお連れしたら「ハンディを示せ」とキヤディマスタがいう。

「そんなものはない」と答えると「素振りせよ」とききました。そのお客様はハンディキャップ8だったのですね、素振りをみてOKとなりました。

一方、タイは会員同伴もハンディキャップ制限もありません。「ルール」と「ルールズ」。どちらがよいというわけではなく、それぞれにより面もあれば悪い面もあり、町もそれぞれに特色があります。もし、住むとすれば？ 独身ならバンコック、家族持ちならクアラルンプールをお勧めします。

拜見・小林洋行野球部 会社発展と共に歩む

小林洋行社長 清覚 秀雄



毎年五月から六月にかけて開催される商品取引員親睦野球大会は、社の名譽をかけて日ごろ磨いた腕を競い合う場である。主催は日刊工業新聞社で当先物協会の協力のもと、二十一、二十二、二十三の三日間、千葉マリンスタジアムで行われる。

この野球大会で圧倒的な強さを発揮するのが小林洋行チームで、昭和六十三年以降、十四年間でなんと十二回も優勝(二回は雨天中止)した。

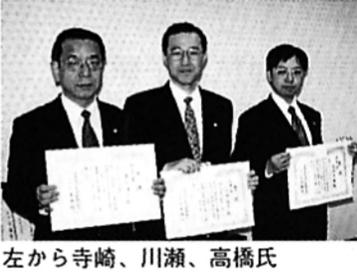
平成八年にサンワード貿易に敗れるまで、対外試合六十八連勝という前人未踏の金字塔を打ち建てた。小林洋行AチームとBチームで優勝を競ったこともあった。清覚さんは、野球王国広島出身で高校時代から球道一途。「野球を通じてチームワークの大切さを学び、会社の業績向上にもつながる」と野球の効用を説き、念も忘れぬ。

なやかに表彰式

商品先物標語優秀作

当先物協会は十二月十八日、「商品先物の明るい未来創造に資する標語」の優秀作表彰式を、同協会会長室で行った。

二家勝明会長から最優秀賞の寺崎洋二氏(フジトミ)、優秀賞の高橋成典氏(日本ユニコム)、川瀬達成氏(三貴商事)に表彰状を渡し、坂井康明広報委員長



左から寺崎、川瀬、高橋氏

私の好きな「文字」募集

事務局だより

新年明けましておめでとうございます。取引員および関係団体の皆様におかれましては、今年もさらなる発展とご健康でありますよう祈念しております。

さて、本年最初の企画として、当先物協会ニュース一面の「私の好きな文字」を取引員および関係団体の皆様より広く公募したいと思います。「我こそは!!」

「この文字には」などの思い入れがある方は是非ご応募下さい。お待ちしております。詳細につきましては、事務局までお問い合わせ下さい。なお、公募作品は3月号以降の掲載となります。

先物協会ニュースもさらなる充実を目指し取組んでいきたいと思っております。ご支援、ご協力をよろしくお願いたします。

証言・戦後先物史 東穀と私(1)

東京穀物商品取引所相談役 石田 朗



鈴木 四郎 氏

大衆化路線の旗手 鈴木四郎氏

石田 東穀には当時、農林省出身の山根東明さんが常務理事でおられ、私はその補佐役と聞いていました。ところが来てみると、山根さんは退任、少々あわてました。農林省時代、東穀とはあまり縁がなかった。私は主に肥料の生産が商工省(後の通産省、現経産省)に移管されると、同省に通算五年いたりしましたからね。

―― 蚕糸局長時代は、生糸の仕手職などで苦勞され、その実績を買われて取引所入りしたという説もあります。

石田 それとはともかく、当時、東穀の理事長は初代の山崎種二氏、二代目木谷久一氏、三代目加藤兵八氏と当業者(お米屋さん)が続いたあと、初の専業仲買人出身として鈴木さんが第四代理事長に就任されたのが、昭和三十六年です。先物取引大衆化という時代背景のもと、専業仲買人の旗手として登場された。その後九年間、東穀の理事長として、全国の取引所の先頭に立って活躍されたのです。

―― ところが、昭和四十五年役員総辞職という前代未聞の椿事が発生、石田さんは渦中の一人となった。

石田 急テンポの大衆化路線のひずみで紛議が多発し、国会でも議論を呼ぶようになった。昭和四十五年四月三日の商工委員会には鈴木四郎(全商連会長)、山本博康(全仲連会長)、佐伯義明(関門商品理事)、沙羅双樹(作家)、亀高清(不正防止協会代表)の各氏が参考人として呼ばれた。小豆の解合問題もからんで、取引所管理がマスコミの指弾を浴び、鈴木さんが辞意を表明、総辞職となった。私とすれば、理事長が辞任する以上、補佐するものは残るべきではないとの考えでした。(CJ)